

では、**第1テモテへの手紙 6章**。ここが最終章であり、今日が第1テモテの最終回となると思います。で、アウトラインももう一度振り返りたいと思います。**1章**は『教会とそのメッセージ』。**2章・3章**は『教会とそのメンバー』。**4章**は『教会とそのミニスター』。で、**5章、6章**は『教会とそのミニストリー』であります。全部教会と“M”がつく単語です。“メッセージ”、“メンバー”、“ミニスター”、そして“ミニストリー”であります。“ミニスター”は、一般的には聖職者と訳されます。プロテスタントの専門用語では“教役者”。牧師や教会の指導者を指す言葉、その“ミニスター”の働きが“ミニストリー”であります。“ミニストリー”もよく教会では“奉仕”というふうにも訳されますし、“宣教活動”、教会のありとあらゆる活動の全般を“ミニストリー”と言います。勿論“ミニストリー”は、教会の中だけで行なわれるものではありません。特に先週見た**5章**は、教会内のミニストリーの話でありました。で、今日最終回として見る**6章**は、教会の外におけるミニストリーです。**5章**は教会内のミニストリー、**6章**は教会外のミニストリー。これを別の表現で言いますと、**5章**は教会、**6章**は社会です。教会におけるミニストリーと、社会におけるミニストリー。それを今から皆さんにお伝えしていきたいと思います。

早速**1節**に目を留めて下さい。**6章の1節**であります。『くびきの下にある奴隷は、自分の主人を十分に尊敬すべき人だと考えなさい。それは神の御名と教えとがそしられないためです。』パウロの時代は1世紀です。ローマ帝国の時代です。当時は奴隷制が敷かれておりました。ローマ帝国の大半は奴隷で占められていました。全人口の3分の1が奴隷であったわけです。とりわけローマの帝都であるローマ市では、その人口の8割9割、80%から90%が奴隷であったと言われてます。で、その奴隷の中に、イエス・キリストを信じる者も多く起こされていったわけです。で、**1節**では“くびきの下にある奴隷は”と言われてますが、これは自分の主人が不信者である場合、ノンクリスチャンである場合の話であります。**2節**には“信者である主人を持つ人は”とありますので、**1節**は不信者の主人を持つ奴隷です。これに対して、パウロが勧めていることです。これが社会においてクリスチャンが為すべきこと。それがすべて神の働き、ミニストリーとなるということでもあります。その注意点としまして、“自分の主人を十分に尊敬すべき人だと考えなさい。”“十分に”という言葉は、ギリシャ語で直訳しますと、“すべて”であります。ですから、“ある程度”ということではありません。“完全に”ということ。すべて尊敬すべきだと。「否、うちの会社の上司は、とても尊敬できません。うちの経営者はとても尊敬できません。」と言うかもしれません。しかし、聖書はこれを命じています。ノンクリスチャンの主人を、現代的に表現すれば、上司を、現代は雇用主というふうにご考えて下さい。“十分に”というよりも“すべて”尊敬しなさい。その中でもう一つ注意して頂きたいことは、“それは神の御名と教えとがそしられないためです。”私たちは十戒の中で、“あなたの父と母を敬いなさい。”と命じられています。そこには特別条件はつけられていません。どんな父親でも、どんな母親でも敬うように、命令されています。それと同じようにどんな主人でも、どんな上司でも尊敬しなさい。これは神の命令であるといいましたけれども、これが神の定めた秩序というものです。すべての権威は神が定められたものであります。これについてもっと知りたければ**ローマ 13章1節**からずっと読み進めて見て下さい。すべての権威は神が立てたものであります。ですから、私たちはその神に従うという意味で、どんな権威に対しても服するわけであります。ただ、例外的には自分の信仰に抵触する場合、反聖書的な、非聖書的なことを命じられたりする場合は、これは人に従うより神に従うべきですという、もう一つの聖句に私たちは従うわけであります。その辺はバランスを持って捉えて頂きたいと思います。盲従しなさいという意味ではありません。ただ、原則はどんな権威に対しても私たちは服するべきであり

ます。

で、尊敬しながら、私たちはクリスチャンとして出来る限りのことを尽くすわけです。職場においてクリスチャンはどの従業員より、どの社員よりも真面目で勤勉でなければなりません。いわゆる謹厳実直という言葉であります。謹厳実直という言葉が当てはまるのは、正にクリスチャンであります。クリスチャンこそ謹厳実直な人でなければいけません。で、それがクリスチャンの従業員、社員、パート、社会で働いている人たちの最大のミニストリーであるということです。それこそがクリスチャン信仰の証となるということです。忠実なしもべ、忠実な社員、模範的で勤労を有難く思われる、そのような従業員。会社や学校では皆勤賞だとか精勤賞、それが送られるならば正にクリスチャンでなければならないということです。

その一方で、「どうもクリスチャンは信用出来ない。なぜならば、仕事中でもいつも怠けようとして、いかに楽をするか、いかに怠けることを考えるのか。誤魔化そうとする。ちよろまかそうとする。言われたことしかやらない。適当である。いい加減である。だからクリスチャンの従業員は、当てにならない、信頼できない。」と言われてしまうならば、この**第1テモテ6章1節**の後半の言葉に抵触するわけです。“それは神の御名と教えとがそしられないためです。”“そしられないため”というのは直訳すると“冒瀆されないため”です。新共同訳では“冒瀆”という言葉を使っています。この世の人たちは、神を信じないという理由を探し求めています。いかにして神を信じなくていいのか。その理由をクリスチャンがひとつ与えてはいけないということです。ただでさえこの世の人たちは神を信じない理由を一生懸命躍起になって探し求めている中で、クリスチャンが彼らにつまづきを与え、神を信じないような理由を与えてはいけない。

“神の御名”を、名前というのは神の性質、属性、権威、力です。そして“教え”は、勿論聖書の教え、教理のことです。仕事ぶりを見て、クリスチャン信仰とはこんなものか。クリスチャンの信じる神というのはこんなものかと。そしられたり、冒瀆されたりしてはならないということです。クリスチャンこそ、誰よりも真面目で、誰より勤勉で、謹厳実直でなければならない。働き者でなければいけない。努力家でなければいけない。言われたことしかやらないような、楽をすることしか考えていないような、そんな労働者であってはならないということです。ハードワーカーでなければいけないということです。せつせと働く、立派な働きぶり。これがクリスチャンの社員としての、従業員としての、最大の証であるということです。口では偉そうなことは言えます。口では聖句を引用してみたり、また敬虔なフリも出来るかもしれませんが、職場でいい加減に働いているならば、平気で遅刻するとか。勝手に早退するとか。無断欠勤するとか。また如何に楽をするのか。怠けることばかり考えているようなクリスチャンの労働者は、正に神にとっては“面汚し”ということです。“神の御名と教えとが”そしられてしまうということです。もし、ノンクリスチャンの経営者が「優秀な人材を探しています。」ということを知ったら、「是非うちの教会に来て下さい。うちの教会には優秀な人材が揃っていますから。」そのように言える者でなければ、そのように言える教会でなければならないということです。まあ、ハローワークだとか、またいろんなところで人々は雇用者を探しているわけです。優秀な人材もいろんな有名大学に行ったり、この世は真面目に働く人、忠実に働く人、熱心に働く人、勤勉な人たち、優秀な人たちを捜しているわけがあります。本来であるならば、教会にはそのような優秀な人材が揃っていなければならないということです。雇いたいと思える人たち。教会はそのような人材の宝庫でなければなりません。そうすることによって“神の御名と教えとが”そしられないんです。冒瀆されないわけです。いつも怠けている。真面目に働かない。いい加減だ。それは証人<sup>あかしびと</sup>としては失格であります。

フランシス・シェーファーという人の言葉を紹介したいと思います。世界的に有名なキリスト教の弁証家、哲学者であります。そのフランシス・シェーファーの言葉として「キリスト教は、如何なる見物人に「キリスト教徒が人生を否定的に見ている。」と結論を下すようにしてはいけません。私たちの人生の隅々

まで人格の最も高いレベルに達することができます。」と。これはちょっと難しい表現になっていますけれども、クリスチャンを見るならば、誰もが否定的なものを感じない。肯定的なものを感じるということです。

D.M.ロイドジョーンズという 20 世紀最大の説教者のひとりの言葉も紹介したいと思います。「キリスト者は、キリスト者であることによって、自動的に社会に影響を及ぼすのである。」クリスチャンがクリスチャンとして信じている通りに生きているならば、信じている通りに職場で働いているならば、もうそれだけでその職場に、その社会にクリスチャンとしての影響を及ぼすことが出来るということです。

ただし、誤解が無いように釘を刺しておきたいと思います。だからといって、「仕事人間になれ。」と言っているわけではありません。だからといって、「仕事第一にせよ。」と言っているわけではありません。家族をないがしろにしてまで、仕事にかかりっきり。仕事がすべてというような仕事中毒になってはいけないということです。

社会学者で東大の名誉教授である見田<sup>みた</sup>宗介<sup>むねすけ</sup>という人の興味深い言葉があります。見田 宗介の言葉です。「生き甲斐とは、神の観念の不在を埋めるものである。」「仕事が生きて甲斐です。私から仕事を取ったら何も無いです。残りません。」と。仕事第一、仕事がすべて、男性に多いと思いますけれども、そういう仕事を生き甲斐にしている人たち。退職したら、もう何も無い。役職を取られたら、もう何も無い。何のために生きたらいいのかも分からない。そういう初老の男性も多いわけです。「生き甲斐とは神の観念の不在を埋めるものである。」つまり、仕事を偶像礼拝としているわけです。仕事というものを礼拝しているわけです。仕事が自分の心を満たすと思っているんです。仕事が自分の夢を叶えると思っているわけです。仕事が自分のアイデンティティーを与えるものだと思っているわけです。仕事をしていない自分には価値が無い。仕事で認められることをいつも求めるわけです。仕事で成果を上げることを何よりも喜びとするわけです。でも、いつまでもその仕事があなたに与えられているわけではありません。いつか、あなたは仕事をしたくても出来ない日がやって来るわけです。若しくは仕事において疲れ果て、もう嫌になってしまった。すべてを投げ出したい。頑張っても、頑張っても報われない。失望したり裏切られるような思いをするわけです。何が生き甲斐なのか。このことは皆さんに考えて頂きたいことだと思います。クリスチャンの労働者は、仕事そのものを生き甲斐にするわけではありません。クリスチャンの労働者の生き甲斐は、一言で言えば“神”です。神様がここで命じている言葉に忠実に、“自分の主人を十分に尊敬すべき人だと考えなさい。”上司を心から尊敬するわけです。尊敬出来ないような人でも。クリスチャンでなくてもです。“それは神の御名と教えとがそしられないためです。”これが目的です。上司を尊敬するのは、神様がどんなに素晴らしい方なのか、その名前がどんなに偉大であるのか、その教えがどんなに正しいのか、真理であるのか。そのことを証明するために、上司に心から仕えていくわけです。その人にとって生き甲斐は、仕事ではなく、神です。神様が素晴らしい。神と生きた関係を持っていること。むしろその人にとっての究極の主人は、神ご自身なわけです。神が主と呼ばれるのは、そういう意味でもあります。私の主人は、私の上司は、私のボスは、神ご自身であると。この神に仕えるようにして上司に仕える。この神に仕えるようにして、会社に、社会に仕えていく。これがクリスチャンの本来のあり方であります。

で、今度は 2 節に目を移して頂きたいと思います。『信者である主人を持つ人は、(今度は奴隷の立場で主人がクリスチャンである場合。)主人が兄弟だからといって軽く見ず、むしろ、ますますよく仕えなさい。なぜなら、その良い奉仕から益を受けるのは信者であり、愛されている人だからです。あなたは、これらのことを教え、また勧めなさい。』クリスチャンの雇用主、経営者、上司、ボスの場合、つつい“主にある兄弟”ということで、又は“主にある姉妹”ということで、ななああになってしまうことがあります。でも、日本語にも『親しい仲にも礼儀あり』と言う言葉があります。愛という言葉がここに出てきますが、第 1 コリント 13 章は有名なまことの愛を教える愛の章です。“愛は寛容であり、愛は親切です。また人を

ねたみません。”という有名なくだりがあります。その中に、“愛は礼儀に反することをせず”という言葉があります。“愛は礼儀に反することをせず。”兄弟だからといって、クリスチャンだからといって、礼儀に反することをしてはいけません。上司は上司です。しっかりと礼儀をもって向き合えばいけません。そして、クリスチャンであるその立場を利用してはいけません。クリスチャンであることを良いことに、何でも赦される。このように都合よくその立場を利用してはいけないということです。クリスチャンであることを理由に、いろんな怠ける理由を考えてはいけないということです。クリスチャンだから赦してくれるだろう。クリスチャンだから、寛大に、寛容に、多目に見てくれるだろう。日本はそれほどクリスチャン企業がないですけれども、でもよくありがちなのは、クリスチャンの上司を持つその会社において、従業員がクリスチャンであって、お互いに神を信じる者として気持ちよく働いているわけですけれども、でも怠け癖がついてくると、いろんな言い訳をするようになります。だんだん関係がナァナァになってくると、その立場をうまく利用するようなことを、平気で言っただけのようになるってしまいます。たとえば、祈っていて、聖書読んでいて、伝道していて、証しをしていて、教会に用事があって遅刻しました。とか、ノルマをこなせませんでした。とか、仕事が出来ませんでした。いろんな言い訳をするために、霊的な口実を使うわけです。“神様が”なんていう“聖霊が”とかそういう言葉をうまく使って、上司はそれ以上何も言えないわけです。祈ることは大事。聖書を読むことも大事。伝道することも大事。教会の用事も、それも大事なことである。そういったことを理由として、言い訳として「ミニストリーのゆえに」とか、そういうことを言われると、反論出来なかつたりするわけです。否定できないからです。ノンクリスチャンはそんなことを言っても全然通用しないわけです。クリスチャンの上司にはそういうことが通用すると思って、いろんな口実に使って見るわけです。気を付けたいと思います。あなたの上司がクリスチャンだろうと、ノンクリスチャンだろうと、すべてのクリスチャンは謹厳実直でなければいけません。とりわけノンクリスチャンの上司に対しては“神の御名と教えとがそしられない、冒瀆されないため。”証しにならないようなことをしてはいけません。

また、上司がクリスチャンである場合、クリスチャンだからといってその立場を自分に都合よく捉えてはいけません。怠ける理由を、いい加減にやっつけていい理由を、霊的に口実を付けてはいけません。そして、むしろクリスチャンの上司だからこそ、ますますよく仕えて、ますますその上司に対して、その会社に対して、利益になるように熱心に働きなさいということです。聖書においてクリスチャンは皆、“しもべ”と呼ばれています。誰もがイエス・キリストを心で主と信じ、口で主と告白するわけですから、その時点で、信仰告白をした時点で、「これからは私の人生の主はイエス・キリストです。」と表明するわけです。イエス・キリストは罪からの救い主であり、同時に人生の主でもあるわけです。これからは主人が、イエス・キリストが、私の人生を導いて下さる。これからは、イエス・キリストが私を守って下さる。養って下さる。そして私に為すべきことを司令して下さる。これからは、イエスの望まれる者に変えられていく。イエスに従うものになっていく。それがクリスチャン人生であります。その意味において、すべてのクリスチャンは奴隷であるわけです。しもべであるわけです。

にもかかわらず、しもべだと思っていない人たちが大勢おられます。しもべの心を持っているかどうか。それはどうやって分かるのでしょうか。それは、あなたが、私が、しもべのように、奴隷のように扱われた時です。その時によく分かります。まるで奴隷のように、しもべのように扱われた時、あなたはどう振舞いますか。カチッときますか。ムカッときますか。何様かと思うのでしょうか。その時点であなたは自分がしもべだと思っていないということが露呈したということです。証明されたということです。もし、自分がしもべである、奴隷であるということを自認しているならば、しもべのように、奴隷のように扱われても文句はないはずです。その通りの者です。私はそういう身分の者です。平安があるわけです。でも、心が騒ぐ。まるで奴隷のように、しもべのように扱われたら、我慢がならない。そう思っているならば、

もはや自分はしもべではないということです。ですから、仕事をする上でもこのことを考えて欲しいと思います。また、この中には主婦の方もいるわけですが、主婦であれば家の主人に仕えているわけです。家庭の主に仕えているわけです。そこにも適用出来ると思います。口では「うちの主人が。」と言いますが、全然主人じゃないわけです。儀礼的には、社交辞令のように「うちの主人が。」ということをお互いにする上では言うかもしれませんが、心の底から“うちの主人”とは思っていないわけです。本当に“うちの主人”ならば、その主人の言うことが絶対なわけです。奴隷は逆らってはいけないわけです。

「それは男尊女卑ですね。」と思うかもしれませんが、実際にキリストは、まずは究極の主人であるイエス・キリストを主として仕えるものです。その主の言われる通りに私たちは生きるものです。イエス・キリストが「ノンクリスチャンの上司に仕えなさい。」と言えば、仕えるわけです。心を込めて、最大の努力をします。イエス・キリストがまた「クリスチャンの主人に仕えよ。」と言えば、そうするわけです。そして家庭においても「クリスチャンの主人に仕えよ。」「ノンクリスチャンの主人にも仕えよ。」とイエスは言っているわけです。「そんな奴隷扱いは、されたくありません。私は誰にも仕えたくないんです。」それもあなたの選びであります。そうすれば、そうする自由があります。でも、そうしてもあなたの心には満たしが無いと思います。満足感が無いと思います。喜びが無いと思います。平安が無いと思います。自分が主である限りは、あなたは決して満足できない。決して不安からは解放されない。恐れからも解放されない。いつもストレスを抱えています。いつもフラストレーションばかりです。思い通りにいかないからです。自分のコントロールが効かないからです。自分が主である限りは、あなたは疲れてしまいます。虚しさを覚えます。失望します。でも、イエスを主とするならば、あなたには安心感がやって来ます。イエスは完全な主人だからです。たとえ自分が理解出来ないことでも、自分の感情が追いつかなくても、「この方の言われることならば、私は従いたいと思う。」それは私の考えに反したとしてもです。それが私の感情とは真逆のことであってもです。それだけ私たちの主は信頼に足る方であり、それだけ私たちの主は、私たちを愛して止まない方です。愛する主の言われることならば、最も尊敬すべき救い主イエス・キリストの言われることならば、私たちは是非従いたいと思う者であります。それがキリストと呼ばれる人であります。

で、次に3節から見て欲しいと思います。3~6節をまとめてお読みします。『<sup>3</sup>違ったことを教え、私たちの主イエス・キリストの健全なことばと敬虔にかなう教えとに同意しない人がいるなら、<sup>4</sup>その人は高慢になっており、何一つ悟らず、疑いをかけたり、ことばの争いをしたりする病気にかかっているのです。そこから、ねたみ、争い、そしり、悪意の疑りが生じ、<sup>5</sup>また、知性が腐ってしまって真理を失った人々、すなわち敬虔を利得の手段と考えている人たちの間には、絶え間のない紛争が生じるのです。<sup>6</sup>しかし、満ち足りる心を伴う敬虔こそ、大きな利益を受ける道です。』これまでの文脈をしっかりと押さえて頂きたいと思います。流れを受け止めて欲しいと思います。文脈というのは勿論6章から始まっているわけですが、社会におけるキリストの労働者のあり方です。本来の姿です。これに反する者たちも勿論あるわけです。でも、その本来のあり方に対して違ったことを教えるような人たち。「否、別にキリストは、そんなに一生懸命熱心になって上司に仕えなくてもいいんだ。不満があるならば、不満をぶちまければいい。尊敬できないならば、職場を変えればいい。訴えればいい。」そういう“違ったことを教えたり”、“私たちの主イエス・キリストの健全なことばと敬虔にかなう教えとに同意しない人がいるならば”です。これを端的に言うならば、聖書に書かれている通りに生きていない、聖書に書かれていることを軽視して無視するような人たち。彼らはどういう人たちかと言うと、4節に高慢な人である、と言われてます。“高慢”という言葉は、原語のギリシャ語では“煙で取り巻かれている”という言葉であります。又は“のぼせ上がっている”という言葉であります。煙に巻かれて周囲も、自分自身も、見えなくなってしまうという状態をイメージして頂きたいと思います。但し、普通に考えてみて下さい。煙の中に巻かれていると

というのは、大変危険な状態にあります。本来であるならば、煙の中に巻かれていれば、助けを求めるものであります。でも、高慢な人は、煙の中に自分が巻かれていながらも助けを求めない。それが高慢な人だということです。

箴言 16:18 というところに、箴言というのは神の靈感による格言集、金言集というところでは、その箴言 16:18 にこう書いてあります。『高ぶりは（高慢と同じことです。）破滅に先立ち、心の高慢は倒れに先立つ。』聖書の言葉を基準としない。イエス・キリストの命令を軽んじる。聖書の教えよりも自分の考え。イエス・キリストよりも自分の感覚・感性、自分の哲学、自分の価値観、自分の考え、メンタリティー。こういうことを優先しようとする人たちというのは、高慢になっていると。でも、高慢は破滅に先立つと言われています。

『何一つ悟らず（理解せず）、疑いをかけたり、ことばの争いをしたりする病気にかかっているのです。（そういう人は議論のための議論ばかりしているんです。ことばの争いとはそういうことです。拉致の聞かない、答えのないような不毛な議論です。議論のための議論。それがことばの争いです。「あーでもない、こーでもない。」いろんなことを言ってディベートするわけですけども、でもそこには結論は無いわけです。ただ議論をしたいだけ。ただ論争がしたいだけ。ただことばで争い合いたいだけ。正に病気です。）そこから、ねたみ、争い、そしり、悪意の疑りが生じ、（感情面でも、意志の面でも、腐ってくるわけです。）また、知性が腐ってしまって真理を失った人々、すなわち敬虔を利得の手段と考えている人たちの間には、絶え間のない紛争が生じるのです。』

忠実な、誠実な労働者、謹厳実直な労働者であることを、神はあなたにも私にも求めています。でも、違ったことを教える人たちは、「別にいいんじゃない。」で、彼らは敬虔を利得の手段としています。“敬虔”という言葉は、よく“敬虔なクリスチャン”というふうに使いますが、この“敬虔”という言葉は文字通りは“神のような”ということです。で、これを新共同訳聖書では、又は口語訳聖書でもそうですけども、“敬虔”という言葉は、“信心”と訳されています。“信心”を利得の手段とする。“敬虔”を利得の手段とする。宗教ビジネスという言葉も思い浮かべられるかもしれませんが。違ったことを教える人たちは、金になることをいつも考えています。今私がお話したようなことに対して、皆さんはカチンときたかもしれません。そんなのはまっぴらだと思ったかもしれません。「そんな尊敬の出来ない上司にどうして従わなければいけないのか。尊敬しないといけないなんて、嫌です。忠実に仕えるなんて、馬鹿らしい。正直者は馬鹿を見るじゃないですか。そんな教えは嫌です。」と、でもその一方で「いや、別にあなたは真面目に働かなくてもいいんだ。楽をしてもいいんだ。如何に楽をして、見えないところでは誤魔化せばいいんだ。見えるところだけちゃんとやっておけば。世渡り上手であればそれでいいんだ。」と。「努力しなくたっていい。頑張らなくたっていい。」そういうことを言われると、私たちは心惹かれるわけです。そっちの方が聞こえがいいからです。耳障りがいいからです。「そういうセミナーがありますよ。」と言ったら、お金を出してセミナーに行くわけです。「そういうベストセラー本がありますよ。」と言ったら、ついついそういうものを読みたくなるわけです。自己啓発だとか、自己実現だとか。ありのままでもいいんだとか、もっと自分を愛さなければいけないとか、そういうことを言われますと、心理学のアプローチなんかでよくなされることです。聖書とは正反対の方向に導くもの。そうしたものにはついつい私たちの肉が惹かれていくわけです。肉欲がそそられてしまうわけです。で、そういうことを教える人たちは常に金儲けばかりを考えています。神の働き、ミニストリーというものは、基本的には、原則は無料です。全部ただで受けたものですから、ただで与えなければいけない。これがイエス・キリストの教えであります。でも、彼らはそのミニストリーを、敬虔というもの、信心というものを利得の手段と考えています。如何にそれで金を生み出そうか。

具体的な話もしたいと思います。教会の中で違ったことを教える人たち。教会の中でイエス・キリスト

の健全なことばと敬虔にかなう教えを説かない人たちがおります。最近の流行りでは、“ワード・フェイス” Word faith、“ことばの信仰”若しくは“信仰のことば”というようなムーブメントがあります。又は別名“繁栄の神学”、“繁栄の福音”という言葉があります。英語では“prosperity gospel”というふうにも読みます。どういふものかと言いますと、端的に言えば、キリスト教は本来は御利益宗教ではないですけれども、それを御利益宗教に変えてしまうもの。キリスト教信仰を利得の手段と変えてしまうもの。暴利を貪る新興宗教と何ら変わらないものに変えてしまう、そういう動きです。そういう運動であります。それが“信仰のことば” Word faith とか、又は“繁栄の福音”、“繁栄の神学”と呼ばれるものです。「信仰があれば、誰でもリッチになれる。信仰さえあれば、欲しいものが何でも手に入ります。ビジネスでも成功します。すべての悩み・問題は解決します。誰でも繁栄します。病気の人も信仰があれば健康になれる。」そういうことを謳<sup>うた</sup>うわけです。勿論そういうことを言われれば誰もが惹かれていくわけです。「信仰さえあれば。そのためにあなたは信仰によってもっとささげなければいけない。もっと献金しなければいけない。」そこから金の匂いがプンプンしてくるわけです。そういう教えをする人たちのことを“信仰教師”とも言います。Faith teacher と英語で言います。こういう言葉がまだ日本のキリスト教会では馴染みが薄いかもかもしれませんが、アメリカではノンクリスチャンでも知っているような言葉です。よくテレビ等にも出てきます。ベニー・ヒンという有名な信仰教師がおります。アメリカのいろんな一般のメディアでも、そのイカサマぶりがよく報じられています。信仰教師として「信仰さえあれば、あなたは成功する。繁栄する。」で、お金を沢山巻き上げて、いくつもの豪邸を世界中に持っています。プライベートジェットも持っています。高級車も乗り回しています。でも、その姿を見せることで、「私のようになりたければ、私の言うことを信じなさい。私のようにリッチに成功して繁栄したければ、私のために、この働きのために、このミニストリーのために、あなたは信仰によって献金をしなさい。」と、そういうことをアピールして、半ば強要するわけです。で、繁栄しないと、経済的に上向きにならないと、「あなたの信仰が足りないからです。もっとささげなさい。」ということを行うわけです。

そのような教え、これは完全に違った教えです。第1テモテ1章でも、そのことが頭から指摘され、注意が促されておりました。第1テモテ1:3。そこには、『<sup>3</sup>私がマケドニヤ（ギリシャ）に出発するとき、あなたにお願いしたように、あなたは、エペソにずっととどまっていて（エペソはトルコの町です。）、ある人たちが違った教えを説いたり、<sup>4</sup>果てしのない空想話と系図とに心を奪われたりしないように命じてください。そのようなものは、論議を引き起こすだけで、信仰による神の救いのご計画の実現をもたらすものではありません。』その続きもござります。こういった違った教えを持ち込むような偽教師たち、現代でいうところの“信仰教師”という人たち。彼らが教会の中に入り込んで来ますから注意しなさい。暴利を貪る新興宗教ということを行いましたけれども、その“新興”は『新しく興る』というのもそうだけれども、“信仰”そのものを宗教とする、“信仰”そのものを偶像化して神とする。これは、自己啓発のテクニックでもよく使われます。「あなたの欲しいもの。あなたがそうなりたいもの。それを今頭のなかでビジョンを持ってイメージしなさい。あなたの欲しい物。たとえば、車が欲しいです、家が欲しいですという場合は、具体的にどういう車が欲しいのか、どういう家に住みたいのか、それを頭の中でイメージしなさい。そういうものを実際に写真か何かを用意して、それをいつも冷蔵庫に貼っておきなさいとか。壁に貼っておきなさい。それを毎日見るんだ。それを念じるんだと。それが手に入るように、自分が望んでいる地位につけるように。こういう自分になりたいという、具体的にイメージしなさい。そして、毎日イメージして念じることによって、あなたはそうなれます。」と、よく自己啓発セミナーで使いますが、こういうテクニックが教会の中にも入り込んで、「あなたは信じたようになれるから、信じなさい。手に入らないのは、あなたが具体的にイメージしていないからだ。」と、敬虔を利得の手段としています。

はっきりと聖書にはこう書いてあります。6節に『<sup>6</sup>しかし、満ち足りる心を伴う敬虔こそ、大きな利益

を受ける道です。』信仰教師たちは、金儲けのことばかり考えています。成功することばかり、繁栄することばかり、病気が治ることばかり、現世利益ばかり考えているわけですが、聖書は“満ち足りる心を伴う敬虔こそ、大きな利益を受ける道だ。”と明言しています。信仰教師は、「大きな利益が敬虔そのものである。繁栄すること。病気が癒やされること。リッチになること。金持ちになること。これが敬虔だ。これが信心だ。」と説くわけです。でも、聖書は“満ち足りる心を伴う敬虔こそ、大きな利益である。”と真逆のことを言っているわけです。いくら欲しいものを手にしても、飽くなき欲望はあなたを満たしてくれません。「もっと欲しい、もっとくれろ。」せっかく欲しいものを手に入れたのに、隣の人がもっといいものを手に入れる。あなたの友達がもっと新しいものを手に入れる。そうすると、もう満足出来ないわけです。これさえ手に入れば、満足できると思っていたのに。手に入れてみたらどうでしょうか。「こんなもんだったのか。がっかりした。失望した。こんなつまらないものだったのか。全然満足できない。」お金を出しても、頑張っても、心の満たしは得られないわけです。

ところが、聖書は“満ち足りる心を伴う敬虔”を私たちに備えてくれます。それこそが大きな益である。お金でも買えない、かけがいのないものである。神様に与えられているもので、満足できる。素晴らしいですね。それは神を信頼しきっているからです。自分のことを誰よりも愛して下さる方、自分自身を造って下さった造り主です。自分をデザインして下さった方です。その方は、私のすべてをご存知で、私が何を望んで、何が私に本当に必要なのか、何もかもご存知のお方、全知全能の神です。そして、ひとり子イエス・キリストさえも、いちばん大事な、自分のいのちよりも大事なひとり子を与えるほどに愛して下さる神。そんな神、他にはいません。どの宗教を見回しても、そんな神はいないわけです。どの思想や哲学を搜してみても、そのような神、そのような救い主、そのような人生の主は、他にはありません。その方を私たちは信頼しきっているのだから、その神から頂くものはすべて良いもの。そしてその度に与えられているもの、今の現状で十分満足できます。心が満たされているわけです。感謝でいっぱいなわけです。安心感、平安があるわけです。神の下さるものならば、何でも感謝して受け止めることが出来る。心には余裕があります。キリスト教というものは必ずしも現世利益を約束するものではありませんが、キリスト教信仰は必ず来生利益を確約するものです。来生というのは、勿論死後の世界、端的にいうと天国ということです。死んでもなくなる命、永遠の命を約束します。

福音の要約と言われるヨハネ 3:16 には、こう書いてあります。『神は、実に、そのひとり子（イエス・キリストを）お与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が（イエスを信じるものが）、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。』確約されてます。永遠の命を持つ。だから、もう死も怖くないわけです。何を失っても、もう怖くないわけです。仕事を失おうと、家を失おうと、財産を失おうと、愛する家族を失おうと、もう恐れないわけです。もう一つ詩篇 84:11 も是非聞いて頂きたいと思います。非常に重要な聖句です。私もこよなく愛している聖句です。『まことに、神なる主は太陽です。盾です。主は恵みと栄光を授け、正しく歩く者たちに、良いものを拒まれません。』“良いものを拒まれない”とあります。「うちにはメルセデス・ベンツがありません。何故ベンツがないんですか。何故ベンツが与えられないんですか。」それは、あなたにとって良いものではないからです。端的にそういうことです。もし、あなたがここに言われている通り、神の目において正しく歩んでいるならば、神を信頼しきって、神と共に親密な交わりを持ちながら生きているならば、神はあなたに対して良い物を拒まれない、と約束しています。「何故与えられないんですか。何故これが手に入らないんですか。何故この願いが叶わないんですか。」それは、あなたにとって、良いものでないからです。単純なことであります。だから平安で居られるわけです。これが分からない人たちは、欲しいものが手に入らないと、これが必要だというのが手に入らないと、もういつも苛立つわけです。いつも不安になるわけです。若しくはそれを失ってしまうんじゃないか。恐れだすわけです。イエス・キリストという方は、神であるにもかかわらず、私たち



と同じ人の姿をとってこの世に降<sup>くだ</sup>って来て下さいました。そして、私たちと同じ試練を受け、同じ誘惑を受け、にもかかわらず、イエス・キリストは一つも罪を犯さずに、神に喜ばれる正しい生涯とはどういう生涯なのか、神が望む生涯とはどういう生涯なのか、それを身をもって模範的に示されたお方であります。イエスは神の子ですから、欲しいものは何でも手に入れることが出来たはずであります。神は無から創造できる方です。何も無いところからものを造ることが出来るお方です。にもかかわらず、イエス・キリストの地上生涯を見てみて下さい。福音書を見れば、一目瞭然です。イエスの人生、毎日の生活、日常は、実にシンプルでありました。シンプルライフです。

マタイ 8:20 を見て下さい。こういう言葉があります。『狐には穴があり、空の鳥には巢があるが、人の子には枕する所がありません。』狐にも家がある。空の鳥にも家がある。でも、人の子には、イエス・キリストには枕する所がない。すなわちイエスはマイホームを持っていなかったということです。ホームレスとまでは言いませんが、でも財産持ちではなかったということです。不動産を持っていなかったわけです。人々はそれでもイエスに魅了されたんです。福音書を見ると、人々はすべてを捨ててイエスに従った。すべてというのは、仕事も捨て、家庭も捨て。勿論家庭を捨てるというのは、離婚をするとか、家族をないがしろにするという意味ではありません。そうではなくて、イエスに従うことを優先して、そしてイエスとの関係を第一として、イエスに従う決心をするわけです。何故そこまでの決心を彼らがしたのでしょうか。何故そんな決心が出来たのでしょうか。それほどイエスは魅力的な生き方をしていたのでしょうか。でも、現実を見ると、イエスには家が無いわけです。イエスが着ていた服があまりにも格好良かったので、あまりにも美しかったので、だからイエスに惹かれた、というわけじゃありません。イエスの乗り回していた車が、とても格好良かったので、イエスの住んでいた家があまにも豪邸だったので、イエスの経営する会社があまにも凄い会社だったから、だから惹かれたんです、ということは聖書には書かれておりません。むしろイエスは何も持っていませんでした。それでも人々はすべてを捨ててまで、イエスに従いたいと思ったわけです。すべてを捨ててまで従いたいと思える人生。皆さんはそのような人生を今生きているのでしょうか。イエスを知るとは、そういうことです。クリスチャンになるとは、そういうことです。世捨て人になりなさい、と言っているのではありません。誤解しないで下さい。悟りを得るために出家しなさい、と言っているのではありません。そうではなくて、これからはあなたが主人ではなくて、あなたのものが主人ではなくて、あなたの仕事が主人ではなくて、イエス・キリストがあなたの人生の主人となって、あなたを治めていく。あなたを導いていく。あなたを養って、守って、祝福していくということです。他には代え難いものです。

ここでシェークスピアの言葉を紹介したいと思います。「貧乏でも満足している人間は金持ち。それも非常な金持ちです。だが、大金持ちでもいつ貧乏になるかとビクついている人間は冬枯れのようなものです。」冬枯れのような生活を送っている人が、この中にあるのでしょうか。申し分のない身分でも、何不自由無い生活をしていても、それでも冬枯れのような生活を送っているような人たち、結構多いと思います。

テキストに戻って頂いて第1テモテ6章7節。『私たちは何一つこの世に持って来なかったし、また何一つ持って出ることもできません。』これは真理です。誰も反論は無いと思います。裸で生まれてきたのです。誰も服を着て生まれてきた人はいません。裸で生まれ、裸一貫で世を去っていくわけです。どんなに沢山のものをこの世で得ても、蓄えても、残しても、最後は裸一貫で世を去っていくんです。毎回毎回葬儀に参列し、毎回毎回火葬場に行く時に、このことを考えて下さい。何も持ってこの世を去ることは出来ないわけです。すべては灰になってしまうわけです。人は塵から生まれ、塵に帰るものだ、と聖書は言っています。これが真理です。認めたくないかもしれませんが、これが事実であります。すべて目に見えるものは、形あるものは、崩れ去るもの。これは科学の法則でもあります。熱力学の法則。エントロピーの法則です。必ず朽ちていくわけです。進化論は、この熱力学の法則に反することを教えているわけです。非科

学的なことを教えています。進化するんじゃないなくて、退化するんです。これが真実であります。にもかかわらず、私たちはその退化してしまうもの、朽ちてしまうもの、塵に帰ってしまうようなものに、目を奪われてしまうわけです。魅了されてしまうものです。くだらないものと言えると思います。永遠には価値の無いものと言えると思います。そんなものに、時間をかけ、労力をかけ、お金をかけているわけです。天国に行った時、そこにはあなたが地上で躍起になって「これがないと生きていけない。これがあつたら満足できる。」というようなものは、ほとんど無いと思います。少なくとも皆さんが、金があれば、と思って金を蓄えようとするかもしれませんが、天には金もあるんです。黙示録を読むと、天の都の、神の都の道路に使われています。地上で言えば、アスファルトと同じレベルで使われているわけです。天国では、金なんてものはアスファルトと同じです。でも、そのアスファルトを私たちは一生懸命躍起になって集めようとしているわけです。コンクリートのようなただの産業廃棄物を一生懸命蓄えようとしているわけです。天において金はその程度のもです。「マイホームを持つことが私の夢です。」でも、あなたの地上のマイホームは天にはないわけです。でも、天にも神の家、父の家が用意されています。その父の家が、あなたの本当のマイホームです。で、それを見たならば、あなたが地上で躍起になってこのために汗水垂らして、骨折ってローンして、借金のために奔走して手に入れたものが、どんなにちっぽけで、みすぼらしくて、くだらないものなのか。それを見て後悔すると思います。永遠に住む住まいは、もうただで用意されていたのに、私はこの地上で朽ちてしまうもののために多くの時間を浪費してしまった。もっと価値ある生き方を出来たはずなのに、後悔の少ない生き方を出来たはずなのに、地上に宝を蓄えることばかりに躍起になっていた。天に宝を積む機会がいっぱいこの地上で与えられていたにもかかわらず、人生を無駄にしてしまった。天においては何の未練もありません。すべてが揃っているからです。あなたが夢想だにしなかった想像を超えるような素晴らしい祝福が天にはあります。でも、その天の祝福をよりエンジョイできるために、地上生涯が与えられているとしたら、あなたははどうでしょうか。そのための地上生涯だと思っていたら、天に行った時あなたは後悔すると思います。たとえば頭に連想してみてください。あなたは大人として、運転免許証を持つ者として、あなたが欲しい車が目の前にあります。で、あなたにそれがプレゼントされます。「自由に乗っていいですよ。それはあなたのものでしょう。」と言われたら、大喜びですね。でも、大人としてあなたの目の前にミニカーが置かれています。同じクルマですけども、そのミニカーは本物じゃないわけです。おもちゃです。本物そっくりに作られているかもしれませんが、それは所詮はおもちゃのミニカー。乗ることは出来ません。乗り回すことは出来ません。天において本物が用意されて、その本物を自分のものとしたいならば、地上でライセンスを得なければいけないんです。地上でちゃんと成熟したクリスチャンにならなければいけないわけです。子供のままで、資格も取れないままで、天におけるすべての祝福を自由に満喫できる、それをすべて取り扱うだけの成熟度をこの地上で得ることが出来るわけです。にもかかわらず、いつまでも子供染みたクリスチャンのままで、全然天の価値が分からないただの子供です。小さな子供からすれば、本物の車なんて魅力がないわけです。遊べないからです。ミニカーの方がいいわけです。あなたはそれでいいでしょうか。ミニカーのままでいいでしょうか。そういうことも卑近な例で皆さんにも考えて頂ければと思います。

で、8節で『衣食があれば、それで満足すべきです。』これは命令です。“すべきです。”とありますけれども、本来原文では命令形です。“衣食があれば満足しなさい。”命令です。衣食、これは勿論着る物と食べる物です。着る物と食べる物があれば、満足しなさい、と聖書は命令しています。皆さんは今服を着ていますか。着ていなかったら困りますけれども。着ているならば、満足しなさいと言われていています。服を着ているのにあなたは不満を漏らしているでしょうか。不平を言っているでしょうか。命令違反です。皆さんは御飯を食べましたか。ここ一年間程、御飯を食べていません、なんて人はいないと思います。御飯を食べているならば、満足すべきです。それ以上の不平不満は命令違反です。よくないことです。「足のな

い人を見るまでは、靴のないのをこぼしていたものだ。」と、ある人は言いました。世界人口の1%が、世界の全資産の半分を独占していると言われていています。世界の1%の人たちが、世界の全資産の半分を独占している。「それは私のことじゃありません。」と、あなたは思うかもしれませんが、世界では1日1ドル以下で暮らしている貧困層、絶対貧困とも言いますが、厳密には1.25ドル以下で暮らしている人たち。それはどれくらいいるかという、国連の調べでは、これは2000～2007年に集計したものです。12億人いると言われてますが、世界人口に対して12億人。14億人という試算もありますけれども、5人にひとりとかです。また、1日2ドル未満で、1ドルは最近の相場では90円とか、100円と分かり易くイメージして頂いてもいいですけれども、2ドル未満で生活している人は、世界に30億人、半分近い数字です。私たちは1日いくらで生活しているのでしょうか。1日100円で生活している人。200円で生活している人。そういう人たちが絶対貧困と呼ばれます。それ以上の人たちは、3ドル4ドルという話ではありませんけれども、その10倍とか何十倍で生活している人は、貧困じゃないわけです。神に感謝すべきです。あなたには服があります。なのに、ブランド物の服が欲しい、最新のファッションを着ていないと満足しないとか。あなたには食べ物があります。なのに、このグルメが食べられない、このレストランで予約が出来ないとか。どうのこうの。不平不満を言ってるのでしょうか。

賀川豊彦という人も皆さんよく知っていると思います。彼はこういう言葉を言っています。「**金持ちにも二通りある。足りない、足りないを連発する金持ち貧乏。何事にも感謝して心豊かに生活できる貧乏金持ち。**」 私たちも“**金持ち貧乏**”と呼ばれる部類に入ってしまうかもしれません。でも、何事にも感謝できる“**貧乏金持ち**”でありたいと思います。

箴言 30：7～9 もお読みしたいと思います。『7 二つのことをあなたにお願いします。私が死なないうちに、それをかなえてください。8 不信実と偽りを私から遠ざけてください。貧しさも富も私に与えず、ただ、私に定められた分の食物で私を養ってください。9 私が食べ飽きて、あなたを否み、「主とはだれだ。」と言わないために。また、私が貧しくて、盗みをし、私の神の御名を汚すことのないために。』“**貧しさも富も私に与えず、ただ、私に定められた分の食物で私を養ってください。**” 主よ、あなたが私に下さっているもの、それで十分です。それはすべて良いものです。私のものになっていないもの、手に入っていないもの、与えられていないものは、今は私にとって少なくとも良くないものだ、ということを知っていますから、それで十分です。これで平安です。これで満足です。盗みをしてはいけません。税金を誤魔化してはいけません。人のものをもって、借りて返さない、これも盗みであります。返すと約束しながら返さないのは、窃盗と同じです。人のものを借りておきながら返さないのも、これも盗みと同じです。満足すべきです。『**衣食があれば、それで満足すべきです。**』それで満足しなさいと、命令されています。それ以上のものを求めるから、良からぬことを考え、良からぬ計画を練り、良からぬことをするわけです。満足出来ない、不平不満を言うこと自体、聖書では罪だと言っています。神のみこころはすべてのことについて感謝すること。第1テサロニケ5章に書いてあります。

で、テキストに戻って頂いて、6章9節。『**金持ちになりたがる人たちは、誘惑とわなと、また人を滅びと破滅に投げ入れる、愚かで、有害な多くの欲とに陥ります。**』“**金持ちたちは**”とは言っていません。“**金持ちになりたがる人たちは**”とあります。あなたが金持ちならば、神に感謝して欲しいと思います。あなたは神に祝福されているわけです。ここでは、“**金持ちになりたがる人たち**”です。これも誤解しないで下さい。金持ちたちが、非難されているんじゃないです。『**金持ちになりたがる人たちは、誘惑とわなと、また人を滅びと破滅に投げ入れる、愚かで、有害な多くの欲とに陥ります。**』金持ちになりたがる人たちの中には、金持ちもいますし、貧乏人もいます。金持ちは、もっと金持ちになりたがるわけです。貧乏人ももっと金持ちになりたい。金持ちだろうと、貧乏人だろうと、同じです。金持ちになりたがる人たちに対する言葉です。

ここでジョン・ウェスレーという人の言葉を紹介したいと思います。メソジスト運動の父です。日本で言えば、青山学院大学なんかはメソジストの流れをくんでいます。そのウェスレーの像も大学に設置されておりますけれども、そのウェスレーの言葉です。「**お金が私と一緒に位置付けることは決してない。もし、お金が留まったとしたら、私を燃え尽くしてしまうであろう。私はお金はなるべく早く手放すようにしている。そうしないとお金は私の心に入り込んで来てしまうからだ。**」お金は、誘惑とわなと、また人を滅びと破滅に投げ入れる、愚かで、有害な多くの欲に陥らせるものであります。お金そのものというよりも、金銭欲と言った方が正確かもしれません。それは次の 10 節にも見られます。『**金銭を愛することが、あらゆる悪の根だからです。**』と。金銭自体があらゆる悪の根、ではないんです。金銭を愛する、その金銭欲があらゆる悪の根。それが誘惑だとか、罠、滅び、破滅、愚かで、有害な多くの欲とに私たちを陥らせるものです。犯罪目的の大半は、金銭目的です。怨恨とかもありますけれども。金欲しさに人を殺す。金欲しさに犯罪を犯すわけです。金欲しさに税金を誤魔化すわけです。金欲しさにいろいろなことをちよろまかすわけです。

ここで、参考までにお金の話をしたいと思います。お金の仕組みについて話をしたいと思います。この中には小学生がいますから、分かりやすい話をしたいと思います。お金の仕組みについて一つの寓話を使って説明したいと思います。これはある本から引用したものです。お金の問題点を知るために一つの寓話から始めたいと思います。

あるところに自給自足をしていて、足りないものは物々交換で補っている 100 人ほどの小さな農村がありました。そこへ何処からともなく見知らぬ男が現れます。男は村中をブラブラしながら村人たちの生活を観察していました。素朴で疑うことを知らない村人たちは、不審な男にも笑顔で挨拶し、決して豊かとは言えない生活にもかかわらず、家に招いて食事をご馳走したり、寝場所を提供してあげたりしていました。何日か過ぎて、男は村人を集めて、こう話し出しました。「皆さんはなんて原始的な生活をしているのでしょうか。私が良いものを教えてあげましょう。」そう言って、あるものを皆に配り始めました。「これは、“お金”というものです。これを仕えば交換がスムーズに行なえます。」さらに男は「野菜作りが得意な人は八百屋を。狩りが得意な人には肉屋を。釣りが得意な人には魚屋を。料理が得意な人はレストランを。お菓子作りが好きな人にはケーキ屋を。花が好きな人には花屋を。手先の器用な人には大工を。きれい好きな人には掃除屋を。」と各人がお店を開くことを勧めました。それまでは自分の生活に必要なものを各人がバラバラに作ったり、調理したりしていたのですが、男が置いていったお金を使って交換することにより、それぞれが自分の得意なことや好きなことを活かして生活が出来るようになりました。また、作業を分担することにより、村人同士の繋がりも密接になり、静かだった村に活気が出てきました。一年が過ぎて再び男が現れ、村人を集めてこう言いました。「どうです。お金があると便利でしょう。申し遅れましたが、実は私、銀行家です。この前、皆さんに 10 万円ずつお貸ししました。来年また来ますので、それまでに利子を付けて 11 万円を返して下さい。もし、返して頂けない場合は、お店の権利を頂くこととなります。」お金の生活にすっかり慣れてしまった村人たちは、昔のような自給自足の生活に戻る気はありません。お金を貸してくれた銀行家にお礼を支払うのは当然と、利子を付けて返済することを了承しました。再び日常生活に戻り、いつも通り商売に励む日々が続きました。しかし、何となく手元のお金が気になります。既に 11 万円持っている人は、お金を減らさないよう出来るだけ使わないようにしました。また、11 万円持っていない人は、足りない分を何とか稼ごうと、もっと儲かる方法はないかとアイデアを練る人も出てきました。返済日が近づくにつれ 11 万円持っていない人は、焦り始めます。「どうしよう。このままだとお店を没収されてしまう。」こうして仕事の目的が、これまでのように人々が必要とするものを提供することではなく、お金を稼ぐことになっていきました。そして、相手が必要としているかどうかなんて関係

なく、兎に角売ってお金を儲けることを目指すようになります。何となく村人同士の関係もギクシャクしてきました。1年が過ぎ、銀行家は再び村に戻ってきました。「さあ皆さん、約束通り利子を付けてお金を返して下さい。」10万円を100人に貸したので、村にあるお金は1,000万円です。しかし、銀行家へ返すお金の総額は1,100万円です。当然返済出来ない人が出てきます。結局村人の3分の2は返済出来ませんでした。村人の中に、勝ち組と負け組が誕生します。銀行家は、負け組の人たちに向かってこう言います。

「また、お金を貸してあげてもいいですが、皆さんはどうも商売が上手ではないようです。リスクが高いので、今度は利子を20%にして12万円を返してもらいます。但し、今度こそ返して頂けない場合は、お店の権利をもらいますよ。」銀行家は返済の誓約を得て、再び村人にお金を貸し付けていきました。「では、また1年後に。」という話です。

この話を通して、改めてお金の仕組み、金融システムというものを考えさせられます。個々の経済状況、勝ち組、負け組などには惑わされずに、全体を見れば市場に出回っているお金は、貸出額より返済金額の方が常に大きいということ。私たちはそういうことをあまり意識しません。借金を返済しようとするれば、さらに新しい借金をしなければいけない。こういう仕組みになっているわけです。これは無限の借金ループのようなものです。このようなお金の仕組みの歴史を辿っていくと、いつからこんな枠組みの中に、システムの中に身を置くようになってしまったのか、抜け出せないような状態になってしまったのか。生まれた時から、不思議とそれを疑わずに、「それが当たり前だ。それが正しいのだ。」と思って生きてきたわけです。利子というものは、実際には存在しないお金のことです。これを世界は奪い合っているわけです。ある種の椅子取りゲームをイメージして頂ければと思います。椅子取りゲームです。音楽が流れている間、グルグル回るわけです。ここに私たちはいつの間にか気が付いたら無理矢理でも参加させられているわけです。音楽が止まった時、全員が全員椅子に座れるのではないわけです。地面に座らなければいけない倒れてしまう人たちもあるわけです。これがお金の仕組みです。このお金の仕組み。この中には沢山の誘惑と罠があります。人々を破滅に投げ入れるもの、愚かで有害な多くの欲というものが含まれているわけです。気を付けたいと思います。『**金銭を愛することが、あらゆる悪の根だからです。**』もう一度テキストに戻して下さい。第1テモテ6:10『**ある人たちは、金を追い求めたために、信仰から迷い出て、非常な苦痛をもって自分を刺し通しました。**』お金の奴隷になってしまいます。奴隷の話は6章1節からずっと見ているわけですが、お金はあなたを奴隷化します、隷属化します。いわゆる守銭奴という言葉がありますが、正に守銭奴にしてしまうわけです。何度も言いますが、でも、“金銭そのもの”が悪の根ではないんです。“金銭を愛すること”、これがあらゆる悪の根であります。金を愛すると金に仕えるようになり、金がすべてになります。これは別のことで同じです。自分を愛すると、自分に仕えるようになり、自分がすべてになります。神を愛すると、神に仕えるようになり、神がすべてになります。金銭を愛するということは、金銭に仕えることになり、金銭があなたの人生にとってすべてになります。金がすべての人生、それであなたは満足できますか。自分が何よりも一番大事。自分を愛すること。そういう人は自分のことばかりです。自己中心とも言います。自分がすべてになります。残ったら自分しかいないんです。それも悲しいですね。それも虚しいです。“金持ち”ではなくて、“神持ち”にならなくてはなりません。これがクリスチャンが目指すべきところであります。

11節に目を移して下さい。『**しかし、神の人よ。あなたは、これらのことを避け、正しさ、敬虔、信仰、愛、忍耐、柔和を熱心に求めなさい。**』これらのことというのは、これまで見てきた金銭に対する注意点です。金銭欲が危険であるということ。様々なトラブル、災い、弊害、いろんなものをもたらすということを見てきたので、それを“避けるように”、または“逃げるように”という言葉でもあります。誘惑を避けなさい、不品行を避けなさい、という時に使いますが、“逃げる”という言葉がその原意であります。“し

かし、**神の人**”と呼ばれています。この“**神の人**”というのがテモテのことです。聖書の中には“**神の人**”と呼ばれる人が数名出てきます。数えるほど、一握りしか出てきません。滅多に**神の人**と言われる人はいないんです。その数少ない**神の人**、その中のひとりがテモテであります。

たとえば、モーセという人はよく“**神の人**”と呼ばれています。モーセは**神の人**、それだったら分かる。**申命記 33 : 1** に出てきます。(『これは**神の人**モーセが、その死を前にして、イスラエル人を祝福した祝福のことばである。』)

また、エリヤという預言者も皆さん知っていると思います。預言者の代表エリヤも**神の人**と呼ばれています。**第1列王記 17 : 18** (『彼女はエリヤに言った。「**神の人**よ。あなたはいったい私にどうしようとなさるのですか。あなたは私の罪を思い知らせ、私の息子を死なせるために来られたのですか。』)

そのエリヤの後継者のエリシャも、偉大な奇跡を行なうミラクルメーカーとしての預言者、名前がよく知られています。エリシャも**神の人**と呼ばれてます。**第2列王記 4 : 16** (『エリシャは言った。「来年の今ごろ、あなたは男の子を抱くようになるろ。」彼女は言った。「いいえ。あなたさま。**神の人**よ。このはしのために偽りを言わないでください。』)

で、イスラエルの英雄、ヒーローと言え、ダビデであります。ダビデも**神の人**と呼ばれています。**第2歴代誌 8 : 14** (『彼はその父ダビデの定めに従い、祭司たちの組分けを定めてその務めにつかせ、レビ人もその任務につかせ、毎日の日課として、祭司たちの前で賛美と奉仕をさせた。門衛たちも、その組分けに従って、おのおのの門に立たせた。**神の人**ダビデの命令がこうだったからである。』)

他にはマイナーな名前ですけれども、シエマヤという人。**第1列王記 12 : 22** (『すると、**神の人**シエマヤに次のような**神のことば**があった。』)

で、もう一人、あまり名前の知られてない人でも**神の人**と呼ばれているのが、イグダルヤの子、**神の人**ハナン。**エレミヤ 35 : 4** にその名を見ることが出来ます。(『彼らを主の宮のイグダルヤの子、**神の人**ハナンの子らの部屋に連れて来た。それは、首長たちの部屋の隣にあり、入口を守る者シャルムの子マアセヤの部屋の上にあった。』)

ただ、これらの人物以外にも名前は挙げられていませんが、**神の人**と呼ばれている人たちもあります。無名の**神の人**もありますけれども、名前と共に**神の人**と呼ばれているのは、モーセ、エリヤ、エリシャ、ダビデ、シエマヤ、イグダルヤの子**神の人**ハナンだけです。それにテモテが新約聖書では唯一です。新約の中で**神の人**と名前と共に挙げられているのは、テモテだけです。テモテは**神の人**なんです。これも特筆すべきことです。**神の人**になりたければ、テモテのような人にならなければなりません。ただ皆さんはテモテが弱さも持っていたことを知っています。精神的にも、肉体的にも、弱さを抱えていたことを皆さんよく知っています。信仰面でも怖気づいてしまうこともありました。それでもテモテは**神の人**と呼ばれるんです。なぜならば、テモテはパウロにとって忠実なわが子と呼ばれる者だったからです。忠実な者、**神**の言葉に対して忠実に従う者です。それは**神の人**と呼ばれます。その**神の人**と呼ばれるテモテに対して、「これこれを避けなさい。これこれに対して誘惑が来たら、すぐに逃げなさい。ヨセフがポティファルの妻から逃げたように。」で、「ただ逃げるだけじゃない。ただ避けるだけじゃない。積極的にも、アグレッシブにも、求めなさい。これを求めて生きよ。これがあなたの生き甲斐である。」と。それが **11 節**の『**正しさ、敬虔、信仰、愛、忍耐、柔和**（これら）を**熱心に求めなさい**。』このために生きなさいと言っているわけです。“**正しさ**”というのは“**義**”という言葉です。よく聖書では“**神の義**”と呼ばれます。“**神の義**”、これは“**神との正しい関係**”です。神との正しい関係をまず求めなさい。**マタイ 6 : 33** にも『**神の国とその義とをまず第一に求めなさい**。そうすれば、それに加えて、これらのもの（衣食住）はすべて与えられます。』と約束されています。私たちは神との正しい関係をまず求めずに、衣食住をまず求めてしまいます。だから虚しいわけです。でも、**神の人**は違います。優先順位が逆転します。まずは神との正しい関係、**義**

からです。で、次に“敬虔”、これは説明しました。直訳は“神のようになる”ということです。で、“信仰”説明不要だと思います。神を信じること、信頼すること。“愛”神を愛し、人を愛すること。“忍耐”これも大事です。約束のものを手にするために必要なのは忍耐であります。これも聖書に書かれている約束です。“柔和”この“愛”とか“忍耐”、“柔和”これらは努力して得られるものではありません。これは**ガラテヤ 5 章**にある御霊の実の中にも見られるものです。御霊の実、聖霊の実というものです。枝は、力で実を生み出すものではありません。枝は、ただ幹に繋がっているだけで、勝手に実が出来るものです。聖霊の実とはそういうものです。イエス・キリストに繋がっているならば、イエスと正しい関係を持っているならば、気が付いてみたらあなたはイエス・キリストのように敬虔な者に変えられています。気が付いてみたらあなたは信仰が与えられている、愛が与えられている、忍耐が与えられている、柔和という御霊の実を気が付いたら結んでいるようになって。これを熱心に求めなさい。このために時間を使いなさい。このために労力を費やしなさい。このためにありとあらゆるお金だろうと何だろうとそれを投資しなさいと言っているわけです。

で、テキストに戻って頂いて **12 節『信仰の戦いを勇敢に戦い、永遠のいのちを獲得しなさい。あなたはこのために召され、また、多くの証人たちの前でりっぱな告白をしました。』**“信仰の戦い”とありますけれども、聖書に書かれている通り信じて、信頼しきって生活しようとするならば、必ず戦いが生じます。自分の中の戦いもあります。葛藤もあります。「本当に聖書に書かれている通り信じていいのだろうか。本当に信頼しきっていいのだろうか。この通りにしたらどうなるのだろうか。不安です。」心の葛藤も、戦いもあります。また、聖書に従って物事を考え、判断する時に、反対もあるでしょう。無理解もあるでしょう。その結果、馬鹿にされたり、攻撃されたり、迫害されることもあるでしょう。それでも**信仰の戦いを勇敢に戦い、そして永遠のいのちを獲得しなさい**。誤解しないで下さい。この“永遠のいのち”というのは、いわゆる“救い”ではありません。既に“神の人”に対して、救われている者、イエスを信じて永遠のいのちを既に持っている者に対してパウロは語っているわけです。ここで言う“永遠のいのち”とは、天国行きの切符を手にしなさい、というそういう意味合いではなくて、ここの“永遠のいのち”とは、天国の生活をエンジョイするために、言い換えれば永遠の生活を送るための備えをしなさい、準備をしなさい、ということです。そこに用意されている祝福を、さっきも卑近な例を挙げたように、十分に満足できるように。ミニカーで満足しないで、本物で満足できるように、天国を心底からエンジョイ出来るように。地上でしっかりとそのために備えをしなさい、準備をしなさい、ということです。多くの証人たちがそのことを語ってくれております。

今も既に多くの証人たちのいろんな名言を皆さんには分かち合ってきました。フランシス・シェーファーの言葉とか、D.M.ロイドジョーンズの言葉から始めましたけれども、他にも証人たちの名前を挙げながら、名言をお分かちしたいと思えます。3 人の宣教師たちの言葉です。一人は C.T.スタットという有名な宣教師、宣教団体の創始者でもあります。「人生は一度きり、あっという間に終わってしまい、キリストのためにしたことだけが残る。」この言葉が多くの若いクリスチャンの心を捉えてきました。

もう一人の証人、この人の名前は聞いたことがあると思います。中国奥地伝道のパイオニア、ハドソン・テラーという人です。ハドソン・テラーは「私はすべてのことを永遠において獲得できる価値によって判断する。」永遠に価値のあるもののために生きているということです。目に見えるものは一過性のものです。朽ちてしまうものです。儂く滅びゆくものです。そんな灰になってしまうもののために、汗癖して頑張るんじゃないということです。永遠に残るもののために、働くということです。

で、もう一人はジム・エリオットというジャングルの殉教者として有名な人です。エクアドルのジャングルにおいてアウカ族に福音を宣べ伝えたんですが、彼はアウカ族に殺されてしまいます。その後、彼の妻と子供たちが夫を殺した、お父さんを殺した人たちのところに宣教師として行くんです。そして、やっ

て来るわけです。そして彼らはびっくりするわけです。「自分の夫を、自分の父親を殺したような者のために家族が遠路はるばるこんなジャングルの奥地までやって来て、一体これはどうしたことだろうか。」彼らの心は開かれ、夫の死は無駄にはなりません。そのジム・エリオットの言葉は皆さんも何度も聞かされていると思います。「失うことの出来ないものを得るために、持ち続けることの出来ないものを与える人は、決して愚かではない。」失うことの出来ないもの、永遠に価値のあるものです。それを得るために、持ち続けることの出来ないもの、この世で稼ぐもの、この世で手にするものです。この世で貯め込むものです。それは持ち続けることの出来ないもの。それと引き換えに、失うことの出来ないもののために人生を費やすならばそれは賢い生き方だということです。

もし、あなたが永遠の世界がないと思うならば、天国がないと思うならば、この世にしがみつただけです。この世がすべてですから。この世があなたのすべてである以上、この世のものを出来るだけ多く手にし、この世のものを出来るだけエンジョイする。長生きしたい。未練ダラダラです。執着心、いつもそういったものに駆られています。新しいものが出れば、新しいものに飛びつこうとします。他の者が自分よりも多く持てば、羨むわけです、妬むわけです。で、自分ももっと欲しいと思うわけです。飽くなき欲望に常に駆られています。自分が持っているものが失われてしまうことを常に恐れています。その人は永遠の世界を信じていないからです。天国を信じていないからです。クリスチャンは、イエス・キリストを信じる信仰によって永遠のいのちを既に頂いています。天国行きの切符を既に手にしている者です。天国に行くだけがすべてではないわけです。天国に行ってから、そこからが本物の人生なんです。皆さんも外国に行く時に、ある程度外国のその地のことを知らなければ、いろんな情報を得て、「そこへ行ったらいろんな観光名所がある。そこへ行ったらいろんな美味しい食べ物がある。そこへ行ったらいろんな楽しみがある。」と。知らずに行けば、それらに気付かないこともあります。それらを楽しめない場合もあります。ですから、下調べをするわけです。ガイドブックなんかをよく見るわけです。そこに何があるのか。どういうことが出来るのか。どういう楽しみがあるのか。今私たちがやっていることは、天国という見知らぬ世界に対して、出来る限りの情報を手にして、そして出来る限りそこへ行ったらエンジョイ出来るように。すぐにどこに行ったら良いか分かるわけです。無駄な時間は過ごしたくない。天国においては。行ったらすぐに楽しめるように、迷うことがないように。そのために今私たちは聖書を開き、そのために私たちはクリスチャン生活をこの地上で送っているわけであります。

**13 節**に今度は目を移して下さい。『私は、すべてのものにいのちを与える神と、ポンテオ・ピラトに対してすばらしい告白をもってあかしされたキリスト・イエスとの御前で、あなたに命じます。』“すべてのものにいのちを与える神”、この神によって私たちは今日も生かされています。この神には当然生殺与奪の権威が与えられています。自分の力で私たちは生きているのではありません。自分の力だけで生まれてきた人なんて、この中にいません。自分の力だけで今生きているという人は、この中にはありません。あなたは太陽を昇らせているんですか。あなたは空気を造ってるんですか。あなたは水や食べ物を自分で造ってるんですか。農家の人は造っているというかもしれませんが、でも太陽は造れないでしょう。この神に私たちはいのちを握られております。造られたものには当然目的が与えられているわけです。進化論によって偶然に生じたのではありません。偶然に生じたのであれば、生きる目的とか、生きてる価値がありません。居ても、居なくても同じです。偶然に生まれたんですから、自殺しようと、殺されようと、災害に遭おうと、テロに遭おうと、それで死んでも文句を言えないわけです。意味のない存在ですから、居ても、居なくてもいいわけです。でも、そう考えると私たちは生きていけないわけです。「神を信じない無神論者です。進化論を信じてます。神がすべてを造ったなんて信じられません。」そういう人は徹頭徹尾虚しく生きる以外道はないわけです。自分のいのちには意味がない。価値がない。人のいのちにも価値がないわけです。だから平気で中絶をします。だから平気で人を殺します。「何故人を殺してはいけないんですか。」



進化論を学んでいる限り、その答えは得られないわけです。「いいんですよ。人を殺したって。だって偶然の産物ですから。人間のいのちの尊厳なんか無いんですよ。」でも、そうは言えないわけです。そのようには考えられない、考えたくないわけです。人のいのちは何よりもかけがいのないものだと思います。でも、そう思いたいならば、あなたは尊厳あるものとして、価値あるものとして、造られたということ認めないといけません。偶然に生じたとは、言うてはいけません。

で、話を戻したいと思いますけれども、その神を認めつつ、ポンテオ・ピラトに対して。ポンテオ・ピラトというのはイエス・キリストを十字架刑に処したローマ総督の名前です。何故急に“**ポンテオ・ピラトに対してすばらしい告白をもってあかしされたキリスト・イエス**”というような言い方がここでなされているかと言いますと、実際にイエスが不当な裁判にあい、理不尽な扱いを受けて、このローマ総督の前で告白したこと、証言したことを皆さんにも確認して頂きたいと思います。それがヨハネ 18:37 に書いてあります。時間がないので前後の裁判のやりとりのところは割愛して、イエスのそのポンテオ・ピラトに対する告白の言葉だけを見たいと思います。『そこでピラトはイエスに言った。「それでは、あなたは王なのですか。」イエスは答えられた。「わたしが王であることは、あなたが言うとおりに。わたしは、真理のあかしをするために生まれ、このことのために世に来たのです。真理に属する者はみな、わたしの声に聞き従います。』これがポンテオ・ピラト前でイエスがなされたすばらしい告白というものです。イエス・キリストが私たちの王であります。王の王、主の主と呼ばれます。そして、イエス・キリストは真理そのものであります。“真理に属する者はみな、わたしの声に聞き従います。”と言われました。ヨハネ 14:6 には、イエスがこう宣言されました。『わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。』イエスが、真理と宣言されました。ですから、真理に属するものは、真理であるイエス・キリストの声に聞き従うわけです。それがクリスチャンであることの証拠です。

もし、クリスチャンと呼ばれる人が、イエス・キリストの命令に従わなければ、その人は真理には属してはいない。その人はもはやキリストに属していない、クリスチャンではないということです。クリスチャンという呼び名は、キリストに属するという意味です。クリスチャンでありながら、名ばかりであって、キリストの命令に従っていないならば、つまりこの箇所では、**第1テモテ6章1節**から見ている通り、ノンクリスチャンの上司を尊敬しない、馬鹿にする、見下している、立派に働かない、その働きぶりがない、いい加減である、怠けることばかり考えている、クリスチャンの上司であっても、それを逆手に取って、うまく利用して、都合よく怠けるように、いろんな霊的口実を付けながら甘い汁を吸おうとする、雇用関係だけでなく、夫婦の間にも適用できると思います。あなたの主人に対して、家の主人に対して、ノンクリスチャン・クリスチャンかわからず。いろいろ適用が出来るわけです。もし、私たちがそのイエスの言葉、命令に聞き従わなければ、聞き従いたくないと表明するならば、あなたはもはや真理には属していない、イエスを王とは認めていない、神を認めない、そのような不信者であるということです。ノンクリスチャンだということを自ら表明することになります。

で、続きを見たいと思います。14 節以降です。『私たちの主イエス・キリストの現われの時まで、あなたは命令を守り、傷のない、非難されるところのない者でありなさい。』“主イエス・キリストの現われ”とは、一体何の現れ、いつの現れのことなのか。これは結論から言うと、世の終わりにイエス・キリストは再び戻って来られる。その戻って来られるのを、信者のためである場合は、信者を迎えに来る場合は、“携挙”といいます。ここでは“傷のない、非難されるところのない者でありなさい。”15 節には『<sup>15</sup>その現われを、神はご自分の良しとする時に示してくださいます。神は祝福に満ちた唯一の主権者、王の王、主の主、<sup>16</sup>ただひとり死のない方であり、近づくこともできない光の中に住まれ、人間がだれひとり見たことのない、また見ることのできない方です。誉れと、とこしえの主権は神のもので。アーメン。』と。

イエス・キリストが信者のためにもう一度この世に戻って来られます。クリスチャンを地上から引き上げ、空中で会い、天に導き入れて下さるために、そういう**主の現れ**というのが、世の終わりに起こるわけです。で、それは聖書の中に約束されていることであり、預言の一部となっております。世の終わりがいつなのか。聖書によれば、それは今だと言われています。よく世の終わりの終末予言なんてことがマスコミなどでもいろいろと報じられることもあります。紹介されることもありますけれども、昔は『ノストラダムスの大予言』と言われてましたけれども、最近ではいろいろな世の終わりの終末予言なんてことが口に出されて話題となっておりますけれども、聖書は真理の言葉です。聖書に書かれている預言は、これまで一つも外れたことはありません。その中に“携拳”という預言もあるわけです。100%これまで成就してきたことです。で、今もこの世の終わりを示す前兆となるような預言も着々と成就に向かっていきます。世界情勢について世の終わりがどうなるのか。全部聖書は預言しています。ヨーロッパと中国の台頭。そして、中東がどのような対立図を描いていくのか。そういうことも全部聖書に書かれています。ロシアとアラブ諸国が緊密な関係を持っていく。そこにはイランという国名、ペルシャと聖書は言います。また、トルコとか、アフリカのリビアとか、そうした国々が、エゼキエル 38 章、39 章にも名前を見せ、そこには核戦争まで起きるといふこと。具体的に聖書は、国名まで挙げて預言しているわけです。如何様にも取れるといふような言わばいい加減な適当な預言というのは聖書にはありません。文字通りの預言です。イスラエルという国が復興するといふ預言も 1945 年に成就したわけです。1900 年間も国が無かったわけです。世界中に散り散りバラバラになっていたユダヤ人たちが、奇跡的に 1945 年、彼らは聖書の預言通り国を復興することが出来たわけです。その時に世の終わりは、既にファイナル・カウントダウンを始めていったということを、聖書から紐解くことが出来ます。

話を戻したいと思いますが、私たちの神は王の王、主の主、主権者です。この神の言葉に聞き従う必要があります。この世の主権者は皆、栄枯盛衰を辿っていくわけです。必ず死にます。必ず絶えます。天皇も死にます。首相も死にます。時の権力者も皆死んで、滅んでいったわけです。大日本帝国も、徳川幕府も、ローマ帝国も皆、滅んでいってしまったわけです。そうしたものに頼りを置いてはいけませんし、そうしたものに希望を置いてはいけません。必ず裏切られ、必ず失望します。

で、17 節。『この世で富んでいる人たちに命じなさい。高ぶらないように。また、たよりにならない富に望みを置かないように。むしろ、私たちにすべての物を豊かに与えて楽しませてくださる神に望みを置くように。』また再び、金持ちになりたがる人たち、金銭を愛する人たちに対する警告の言葉がここに繰り返されています。ダメ押しするようにして、釘を刺すようにして。“高ぶらないように。”金持ちは、金があるだけで自分が何か偉い人のように思っています。なぜならば、金を持っていると人がやたらめったら集まって来て、かしこむからです。また、あなたの金を目当てであるのをあなたは知ってか知らずか分かりませんが、人がすりよってゴマをすってきます。何か自分が偉いんだ。何か自分が役に立つ人間なんだ、と思ひ込むわけです。で、何でも金を持っていると人が言うことを聞いてくれる。そのような高慢です。気を付けたいと思います。スタンダード・オイルの創始者で、ジョン・ロックフェラーというを皆さん知っていると思います。アメリカの当時の GDP の 65 分の 1 を遺産として残した人物です。ピンときませんと思うかもしれませんが、ビル・ゲイツという人は、皆さんよく知っていると思います。世界一の富豪です。このビル・ゲイツは、ロックフェラーと比べますと、ロックフェラーの時代の GDP の 425 分の 1 です。比べ物になりません。で、そのロックフェラーがこういうことを言っています。「世界で最も貧しい人は、金以外の何も持っていない人である。」史上最大の富豪の言葉として、重みがあると思います。ちなみにこのロックフェラーという人は、一応信仰者でありました。クリスチャンでありました。ジョン・ウェスレーという名前は先程挙げましたが、そのジョン・ウェスレーの「出来るだけ儲けて、出来るだけ貯めて、出来るだけ与えなさい。」という言葉が信条としていたということです。で、またこのウェス

レーの言葉もついでに紹介したいと思います、「あなたの心を神に向かって健全なものにしてください。神の中に、そして神のみにあなたの幸福を探し求めなさい。塵に固着しないように気を付けなさい。この地上はあなたの場所ではない。この地上を乱用しないで、使うように注意しなさい。この世を使って、そして神を楽しみなさい。」これが第1テモテ6:17と同じことを言っています。『<sup>17</sup>この世で富んでいる人たちに命じなさい。高ぶらないように。また、たよりにならない富に望みを置かないように。むしろ、私たちにすべての物を豊かに与えて楽しませてくださる神に望みを置くように。』多くの証人が与えられています。C.S.ルイスもこういうことを言っています。ナルニア国物語の作者である C.S.ルイス。オックスフォードの有名な教授でもありました。「大金持ちであることの危険の一つは、金で買えるような類の幸福にすっかり満足して、そのために神の必要を認めなくなることである。」また、ルイスはこうも言っています。「高慢な者は、何かを所有しただけでは喜ばない。人より多く持って、初めて喜ぶのである。人は金持ちであることや、頭が良いこと、見目麗しいことなどを誇るのだと私たちが言うが、実際にはそうではない。人は他人よりもお金をより多く所有し、より賢く、より外見が良い時に誇りを感じるのである。人が皆、同様に裕福で、頭が良い、美しいならば、誇るものは何もない。人を高慢にするのは比較である。すなわち自分は他よりも優れているという優越感である。競争心という要素が無くなれば、高慢もその姿を消すのである。」と。このように私たちが常に聖書の警句も一つですけれども、信仰者の敬虔に基づいた深みのある警句にも耳を傾けながら、高ぶらないように、目に見えるもの、富は、いつも頼りになるわけじゃありません。ただの紙切れです。ただの印刷物です。音楽が止まったら、椅子取りゲームであなたは残れないわけです。椅子に座れなくなることがあるわけです。たまたま今は音楽が回り続けているだけです。いつか世界の金融システム、経済システムが崩壊する時がやって来ます。そのことも黙示録に預言されています。大バビロンと呼ばれています。この話に踏み込むことは致しませんけれども、是非あてにならない富、あてにならない為替、あてにならない株、あてにならない健康、あてにならない人脈、あてにならない仕事、そうしたものに人生をつぎ込み、人生を賭けるのは、リスクが大き過ぎるということです。神か、富か、どちらか。イエスは「ふたりの主人に仕えることはできない。」と言いました。神にも富にも仕えることはできません。あなたはどちらかに仕えるハメになります。神に仕えるのか、富に仕えるのか。神に使えるのか、“紙切れ”に仕えるのか。この神と呼ばれるお方は、聖書の神です。全宇宙を造られた方です。王の王、主の主です。宇宙の最高権威者と言ってもいいです。その方が「すべてのものを豊かに与えて楽しませて下さる。」と言ってるんです。豊かにというのは、“リッチ” “rich” という意味もありますけれども、“フリー” “free” という意味もあります。”ただで” “ということです。無料で。太陽は無料です。空気も無料です。本来は自然の恵みというものは、神の恵みです。恵みは分不相応な者に与えられる、過分な親切です。私たちは神の目には全く分不相応です。でも、神は太陽を昇らせ、雨を降らせて下さるんです。空気を与えているんです。宇宙のいろんな原則によって私たちを守っています。この原則が崩壊すれば、地球は崩壊します。重力の法則もあります。これが無かったらどうなるでしょうか。宇宙には数学的な秩序というものが、偶然とは思えない、ビックバンで勝手に成り立ったと言えないような、数学的な法則が成り立っているわけです。この法則が天文学者や科学者を神信仰へと導くわけです。「これが偶然出来たとは、とても思えない。こんな緻密な造り、こんな数学的な秩序、デザイン、これが全部偶然で出来たとは言い切れない。」と。すべては神に造られ、すべては私たちにただでエンジョイ出来るように、与えられているわけです。不満・不平とか、そういうことを言ってる場合じゃありません。感謝すべきです。この恵みは感謝すべきものです。多くの金持ちたちは、リゾート地に別荘を儲けようとします。長野県とか、沢山のリゾート地があります。そこに都会の金持ちたちは土地を買い、別荘、別宅を建てるわけです。大枚はたいて。でも、私たちはどうでしょうか。ただで野山を散歩できるんです。わざわざ別荘なんか作らなくても、テントを張ればいいんです。無料です。別荘を作れば、固定資産税、メンテナンスも必要です。で、雪など

で壊れることもあります。そして、また誰かが空き巣に入るかもしれません。ですからセコムも必要かもしれません。お金がかかるんです。維持費がかかるんです。「火事になるんじゃないか。誰かに取られてしまうんじゃないか。」いつも恐れがあります。でも、私たちにはすべてのものがただで与えられているということを忘れてはいけません。「東大にいかなきゃ。ハーバードにいかなきゃ。お金がかかる。」そう思うかもしれません。教育にはお金がかかるとあなたは思うかもしれません。でも、地元の図書館に行ってみてください。ただです。その本はただで全部読めるんです。全部ただで読んでいいんです。なのに、私たちはお金をかけなければ勉強できない、と思います。お金をかけて学歴を買わなきゃいけない、と思ってます。でも、勉強は無料でできるんです。忘れてはいけません。神はすべてのものを、豊かに、フリーで、与えて下さる。心配は必要ありません。その日その日に必要なものは神が備え、その日その日には労苦が十分あります。私たちの持ち物をもう一度検証しなければいけません。この持ち物が曲者です。この財産が曲者です。この不動産が曲者です。物を買うと、あなたはその物に買われてしまうんです。持ち物があなたの持ち主になってしまうんです。古代ギリシャの哲学者のディオゲネスという人がこう言っています。「**かの金持ちは財産を所有するにあらず。やつの財産がやつを所有するなり。**」と。その通りです。折角夢のマイホームを手にしたのに、ローンで縛られている。ローンを返済するために仕事をしている。ローンを返済するために生活しなきゃいけない。クレジットに追われる。物を買うと縛られるんです。物に支配されるんです。物に仕えるようになります。内村鑑三という人がこう言っています。「**永遠から永遠に至るまで、私の所有できるものは神である。**」また、内村はこうも言っています。「**神は私のすべてである。神を失って私は私のすべてを失うのである。**」金持ちではなくて、神持ちです。神が共におられれば、私たちは何も不足はありません。「**主は私の羊飼。私は乏しいことはありません。**」と、詩篇 23 : 1 に書かれています。

で、18 節に『**また、人の益を計り、良い行ないに富み、惜しまずに施し、喜んで分け与えるように。**』神があなたを物質的な面で祝福されたならば、あなたはその祝福を自己満足のために使うのではなく、惜しみなく他者にシェアしなさい。分かち合いなさい。与えよ、と言っています。どうしたらいいでしょうか。慈善活動に寄付するのもそのうちの一つです。でも、クリスチャンは、まず神の言うこと、聖書の言う通りにすることから始めなくてははいけません。それは、まず初めにクリスチャンは持てるものの十分の一を神にささげなさいと言われていました。これを十分の一献金とも言います。什一とも言います。収入の 10% を神にささげなさい。献金という言葉がありますけれども、実際にはその 10% は神のものだと、主のものだと言われてますから、それは献金ではなくて、返金です。これをしないと、神のものを盗むことになる**マラキ書**に書いてあります。先程挙げたロックフェラーも実は十分の一献金を忠実にささげていました。すべての収入の十分の一です。で、十分の一というのは、“初物”とも呼ばれています。農家であれば、現金収入とか金融システムの中に入らない場合、物々交換だった時代は、初物のことを言っていました。十分の一というのは、“初物”です。初物というのは十分の一の重要な概念であるということを忘れてはいけません。というのは、多くの人は稼いだものである程度支払いに充てて、残ったものの十分の一、これを献金すれば、十分の一献金は出来たと思います。でも、初物ということは、純粋に給料の 10% です。天引きとか関係なく、10%。これが初物です。支払いとかあるでしょう。ローンもあるでしょう。それらを差し引いたものの十分の一ではないんです。初物です。それをしていない者は、返金していないわけですから、これは窃盗しているわけです。盗みをしているわけです。十分の一献金をしていない人は、常に不安に駆られています。盗みをしながら平安を持つことは出来ないからです。「ちょっときついですね。きびしいですね。」と思うかもしれません。ランディー・アルコーンという人の言葉も聞いて頂きたいと思います。「**神様、あなたは貧しさの極みにあったイスラエルの人たちに十分の一を要求なさいました。それなのに、あなたの御霊が与えられ、今までにないほど豊かな時代に生かされている私に、十分の一以下でも構**

わないと本当におっしゃってるのでしょうか。」最低十分の一なんです。よくよく考えて見て下さい。あなたの十分の十は、全部本来は神のものなんです。でも、神は敢えて十分の一でいいと言ってるんです。考え違いも甚だしいですね。神が私たちの人生の主であるならば、私たちには何の権利もないはずで、持ち物すべて主人のものです。奴隷には所有権などないからです。「じゃあ、私はクリスチャンになんか、なりたくありません。」と、あなたは言うかもしれませんが、もしあなたがクリスチャンであることを嫌うならば、若しくはクリスチャンになりたくないと思うならば、自分が自分の持ち物を全部手に入れ、管理し、そして責任を持って維持していかなくてはなりません。そこには満たしがあるでしょうか。そこには平安があるでしょうか。「全部自分のものでキープしたい。人になんか、誰にも分けたくない。全部貯め込みたい。手放したくない。十分の一なんか、とんでもない。10%は大き過ぎる。」そのようにあなたが考え続ける限り、あなたはいつまでも、その物に、その金に、縛られたままです。失うことをいつも恐れ、いつも人と比較しながら、いつもあなたは惨めな虚しい思いに駆られていくだけであります。あてにならないもののために、あてにならない人生を送るわけです。チャールズ・スフィンドルというアメリカの有名な牧師がこう言っています。「与える時ほど、私たちが神に似たものとなる時はありません。神は実にそのひとり子をお与えになったほどに世を愛されたからです。」神はひとり子すら、惜しまずに与えた、与える神です。もし、私たちが敬虔に生きたいならば、神のように生きたいならば、神のように与えるものでなければいけません。でも、与える時に私たちは神のように敬虔になれるんです。で、満ち足りるんです。お金が無くても満ち足りるんです。あれがなくても、これがなくても、不平不満から解放されます。失うことの恐ろしさ、不安からも解放されます。これがなくてもいい。あれがなくても大丈夫。生きていける。安心だ。十分の一献金には、厳密には返金というものには、実は金に対する執着心から私たちを解放するという重要な意味があります。自己中心性を手放すということです。自我から解放されるということです。10%にしがみつような卑しい私たちなんです。でも、それを手放す時に、卑しい自分から解放されるんです。10%にこだわるようなちっぽけな人間から解放されるんです。これを思い切って献金箱に投げ入れる。スッキリするんです。「これは神のものだから。私は確かに神に返金した。神の言う通りにした。だから後は神が私の生活のすべての面倒を見てくださる。安心してこれからは暮らせる。」と。ある意味で、良い意味で、神に丸投げ出来るんです。もし、あなたが10%を忠実にささげるならば、自分で汗癖しなくていいんです。やり繰りしなくていいんです。勿論、与えられているものを感謝しながら、その祝福を分かち合うために、分け与えるために上手に運用する必要がありますけれども、これまでのように自分が主となって、主人のように何もかも自分の力でやらなければいけない。何もかも自分で手に入れなければいけない。何もかも自分でメンテして、管理しなきゃいけない。そういうところから解放されるわけです。これは良い知らせと言って良いと思います。十分の一は、英語では“タイズ” tithe と言いますが、これをよく私がアメリカでバイブルカレッジの時代に教えられたその“タイズ”、十分の一に関して教えられた言葉があります。”Tithe is not god’s way of raising money, but raising god’s children.”という言葉です。raising money と raising children というのは、これは語呂合わせになっています。raising というのは、お金を工面する raising money です。raising children というのは、子供を育てる。raising というのは両方の意味があります。十分の一は、お金を工面するための神の方法ではないと言ってるんです。十分の一は、神の子供たちを育てる方法であると。もっと成熟したクリスチャンとなるために、十分の一をささげることによって、お金に執着しない。お金が無くても生きていける。そういう成熟したクリスチャンになれるための神の方法であると、そう説明されるわけです。お金の工面、お金が欲しいから、神が十分の一を要求しているんじゃないです。神はすべてのものを造られた方です。あなたのお金なんて必要ないんです。お金を手放さなきゃいけないのは、あなたなんです。必要があるのはあなた自身なんです。あなたが卑しいからです。あなたがお金に頼るような、つまらないちっぽけな人間だからです。そこから私た

ちを解放するために、助けるために、敢えて神は十分の一というシステムを私たちにお与えになったということです。

で、話を戻していきたくと思いますが、**19 節**、『また、まことのいのちを得るために、未来に備えて良い基礎を自分自身のために築き上げるように。』持つていくことは出来ませんが、あらかじめ送ることが出来る。有名な言葉があります。すべてをあなたは天国に持つていくことは出来ません。でも、あらかじめ天国に送っておくことが出来ます。これが、イエスが言われた「天に宝を積みなさい。」という言葉です。**マタイ 13 : 23** では、天に送ったものの祝福が書かれています。『ところが、良い地に蒔かれるとは、みことばを聞いてそれを悟る人のことで、その人はほんとうに実を結び、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍の実を結びます。』この聖書の言葉を聞くだけじゃなくて、悟る、理解する人は、良い実を結びます。この良い実というのは、百倍にもなる、六十倍にもなる、三十倍にもなる。皆さんが定期預金してもたかが知れています。微々たるものです。投資も投機もリスクが伴います。でも、天における投資は、リスクはありません。元本を割ることはありません。何倍にも、何十倍にも、何百倍にもなって返ってきます。

**マタイ 10 : 42** 『わたしの弟子だというので、この小さい者たちのひとりに、水一杯でも飲ませるなら、まことに、あなたがたに告げます。その人は決して報いに漏れることはありません。』報いに漏れることは決してないと。天において私たちは皆報われます。地上でイエスの名のためにしたこと。先程も紹介した C.T.スタットの言葉にあったように「人生は一度きり、あつという間に終わってしまい、キリストのためにしたことだけが残る。」この“キリストのためにしたことだけが”報いとなって、天においてはカウントされます。ですから、私たちはそのために人生を空費しないように、ムダにしないように、浪費しないようにしたいわけでありませぬ。

また、**マタイ 6 : 19** に『<sup>19</sup>自分の宝を地上にたくわえるのはやめなさい。そこでは虫とさびで、きず物になり、また盗人が穴をあけて盗みます。<sup>20</sup>自分の宝は、天にたくわえなさい。そこでは、虫もさびもつかず、盗人が穴をあけて盗むこともありません。<sup>21</sup>あなたの宝のあるところに、あなたの心もあるからです。』その後**24 節**を見て頂くと『だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。』と。こういう言葉が沢山聖書の中に語られております。持つていくことは出来ませんが、あらかじめ送っておくことは出来ます。

**ルカ 12 : 32** もお読みします。『小さな群れよ。(皆さんにも語りかけられています。小さな MGF の群れよ。) 恐れることはありません。あなたがたの父である神は、喜んであなたがたに御国をお与えになるからです。』私たちの天の父は、喜んであなたに御国を、天国を与えて下ると、言っているわけです。だから、地上のものに、塵にすぎない灰となってしまうものに固着してはいけません。執着してはいけません。未練をダラダラとしてはいけないということです。

もう、そろそろ終わりたいと思うんですけども、ジョン・R・モットーという YMCA の指導者で、ノーベル平和賞を受賞したジョン・R・モットーの言葉。「一日 24 時間のうち、永遠に朽ちざる靈魂の為に、一時間でも用いる人はいないのか。30 分でも用いる人はいないのか。青年よ、諸君の生涯は、諸君の手にある。」永遠に残るもののためにあなたは時間を有効利用しているのでしょうか。くだらないもののために、浪費していないのでしょうか。空費していないのでしょうか。

また、オズワルド・サンダースもこう言っています。有名なクリスチャンの指導者です。「永遠のために人生を費やすことが一番良い人生の過ごし方です。」

また、天路歷程を書いたジョン・バニヤンもこう言っています。「あなたが、神のために良いことは何でもそれが御言葉に沿って行われるのなら、あなたのために宝として金庫の中に蓄えられ、人々と御使いの

前で、あなたの永遠の慰めのために報いとして与えられるのです。」

A.W.トーマスの言葉も同じようなことです。「お金は多くの場合卑しむべきものであるが、永遠の宝へと姿を変えることもある。お金は空腹な人の食事となり、貧しい人の衣類となる。失われた人々の魂を勝ち取り、福音の光へと導く宣教師の精力的な働きが継続して行なわれるために用いられる。そのようにお金は天的価値を持つものに姿を変えるのである。どんな一時的な所有物も永遠の富に変えることができる。キリストにささげられたものは即座に不滅のものになる。」と。その通りです。

で、もう一度 19 節を読みます。『また、まことのいのちを得るために、未来に備えて良い基礎を自分自身のために築き上げるように。』これが今私たちがやっていることです。

で、20 節に『**20 テモテよ。ゆだねられたものを守りなさい。**(テモテに委ねられたもの。これがこの聖書の教えです。パウロがこの手紙を通してテモテに教えていたこと。)そして、俗悪なむだ話、また、まちがって「**靈知**」と呼ばれる反対論を避けなさい。<sup>21</sup>これを公然と主張したある人たちは、信仰からはずれてしまいました。恵みが、あなたがたとともにありますように。』最後に“**靈知**”という言葉が使われていますが、これが“違ったことを教える”その教えの名前です。その異端の名前と言って良いと思います。キリスト教系の異端のたとえば『エホバの証人』、『モルモン教』とか、また『統一教会』とか。そういう名前、具体的な名前が「**靈知**」、原語では“**グノーシス**”という言葉ですけれども、これはグノーシス主義、知識という言葉から来ています。このグノーシス主義については、度々新約聖書の書簡を学ぶ時にも、その教理について、実態についてお伝えしました。物質と霊の二元論からなっています。物は全部悪いもの。霊は、全部良いもの。善悪の二元論も説いています。細かい話は、今はしませんけれども、このグノーシス主義が一世紀の教会にも異端として入り込んでいて、聖書の教えをねじ曲げようと、偽教師たちによってもたらされて来たわけですから、特別な知識を彼らは謳うわけですから。「聖書だけでは不十分です。聖書プラスアルファ。聖書だけじゃなくて、モルモン書も必要です。」とか。「聖書だけじゃなくて、原理講論も必要です。」とか。また「イエス・キリストを信じるだけでは不十分です。イエス・キリストだけが唯一の救いの道ではありません。」聖書は勿論そうは言いませんけれども、プラスアルファです。「イエス、プラスアルファ。イエスを信じるだけじゃなくて、あれもしなきゃいけない。これもしなきゃいけない。」これが全部異端であります。ですから、すべてのキリスト教系の異端の源流は、このグノーシス主義というものに辿り着くわけですから、そのようなものに惑わされないように。だまされないように。全部それらは今私たちが聖書で読んできたこと、学んできたことに反対するものです。でも、それを反対する人たちは、信仰からはずれてしまいました。私たちが注意しなければ、信仰からはずれてしまうこともあります。聖書だけが神の言葉であって、これ以外には必要ないという単純明快な純粋な信仰でなければ、あなたも特別な知識に、この世の教えとか、心理学だとか、自己啓発セミナーだとか、または信仰教師と呼ばれる人たちの新奇な教えに心を奪われてしまいます。「そっちの方が聞こえが良い。そっちの方が簡単そう。そっちの方が御利益がありそう。」なびいてしまうわけですから、でもそうすると信仰からはずれてしまう、と言われてます。気を付けたいと思います。信仰からはずれないように気を付けたいけれども、どうしたらいいのでしょうか。最後に“**恵みがあなたがたとともにありますように。**”やっぱり最後は恵みで閉じられています。私たちに必要なのは神の恵みです。恵み無ければ私たちは生きていけません。恵みとは分不相応な者に与えられる過分な親切です。この**第1 テモテ**のメッセージがすべて神の恵みであるということ覚えて欲しいと思います。私たちが縛り付けるものじゃありません。「禁欲を説くとか、赤貧生活を強いるとか、儉約をして贅沢を一切してはいけない、一切この世のものに固着してはいけない、世捨て人のようにならなきゃいけない。」とかそういうことを言っているのではありません。むしろ、それらから解放され、私たちはただ神様から頂いているものを自由に味わい、エンジョイし、そして神にのみ感謝をささげていく。「自分でも稼がなくてもいい。自分で働かなくてもいい。」そういうことを私たちは誤解しないように、神

が与えて下さった職場ならば、そこで忠実に仕事をすべきです。100%の努力をすべきです。「何でも神様くれるから何もしなくても左うちわで、勝手に金が降ってくる。」と思ったら大間違いです。クリスチャンはどこにおいてもミニスターです。職場はあなたのミニストリーの現場です。職場は神の栄光を現すために神が備えて下さったのです。仕事をする能力も、健康も、その機会も全部神が下さったものです。で、給料も神から頂いているものです。ですから私たちはそれをムダにしないように、無駄な投資をしないように、ドブに捨てるようなことをしないように。ただただ働けることを感謝しつつ、そしてそこで稼いだものも感謝しつつ、それを永遠になくならないもののために用いていく。この地上にいながらもエンジョイしていく。それがクリスチャンのあり方だということです。全部何もかもが恵みでしかありません。全部が恵みであることに気付く時、私たちはテモテのような神の人として歩むことが出来るようになります。今日はこれで、**テモテへの手紙第一**を終わりたいと思いますが、次回には続きとして**テモテへの手紙第二**、これも同じテモテという人物に宛てた手紙ですから、今までの内容も勿論ベースにしています。ですから、是非続けて聞いて頂きたいと思います。これは、パウロがその生涯において最期に書いた絶筆です。遺言状と言っても良いと思います。新約聖書の大半を書いたパウロと言う人物の最後の手紙、最も重要なメッセージが含まれていておかしくありません。ですから、それを次回から学びたいと思います。